

## 第2章 横浜の子ども読書活動の現状

### 1 全国調査にみる子ども読書活動の現状

現代の子どもたちは、本以外にも、テレビ、ビデオ、インターネット等、様々な情報媒体に囲まれて過ごしています。こうした中で、子どもの「読書離れ」等がよく言われますが、実際はどんな状況にあるのでしょうか。

昭和 29 年以来毎年実施されている『学校読書調査』（全国学校図書館協議会・毎日新聞社共同実施）によれば、小・中学生及び高校生の読書冊数の推移は、ここ数年間の状況を全体として見た場合微増傾向にあり、不読者（5月の1か月間に1冊も本を読まなかった子ども）の割合（不読率）も下がってきています。

ただし、小学生と中学生以上とでは、読書冊数の絶対数や不読率の数字に大きな差がみられます。【表 1】

また、『学校読書調査』から1日の読書時間の調査結果を見ると、小学6年生から高校1年生の時期にかけて、0分と答えた子どもの数が年齢とともに急増し、30分以内と答えた子どもの数が急激に減少するという、対照的な結果を示しています。

中学校入学後の生活の激変により読書をする時間がとれなくなることが、子どもを読書から遠ざける一番の原因である、とよく言われますが、この調査結果はそれを裏付けているように見えます。

しかし一方で、各学年で、毎日 30 分から1時間程度読書をしている子どもが全体の 10～15%、毎日1時間以上読書をする子どもが 6～10%程度いることも、注目すべきでしょう。

表 1 子どもの読書状況（2005年版『読書世論調査』毎日新聞社から）

	小学生	中学生	高校生
1か月の読書量	8冊	2.8冊	1.3冊
不読率	9.3%	31.9%	58.7%

注)『読書世論調査』は、前年の『学校読書調査』の結果等に基づき毎年春に公表。

### 2 横浜の子ども読書活動の現状

#### (1) 読書に対する基本的態度

横浜市教育委員会では、平成 17 年 7 月に、市立小学校 2・4・6 年生の児童計 2,908 名、中学校 2 年生の生徒 807 名を対象として、読書に関するアンケート調査（以下、『読書アンケート』）を実施しました。

「本を読むことが好きか」という設問に対して、「好き」、「どちらかという好き」と答えた子どもの割合は、最も少ない中学 2 年生の場合でも 69%を超えています。【図 1】

しかし、全国調査の結果同様、学年が上がるにつれ、「嫌い」と答える子どもが増え、1 か月あたりの読書冊数も減っていきます。そして、学年が上がるにつれ、読書が「好き」と答えた子と「嫌い」と答えた子の読書冊数の差が広がる傾向にあります。【図 2】

図 1 あなたは本を読むことが好きですか（平成 17 年度読書アンケートから）

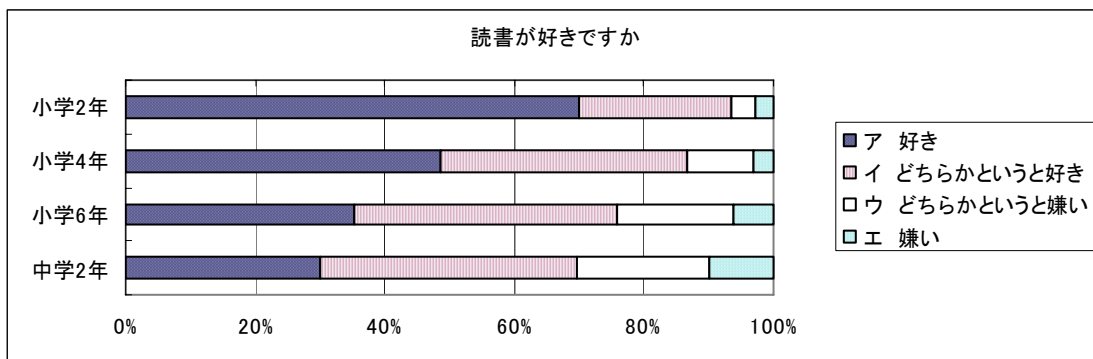
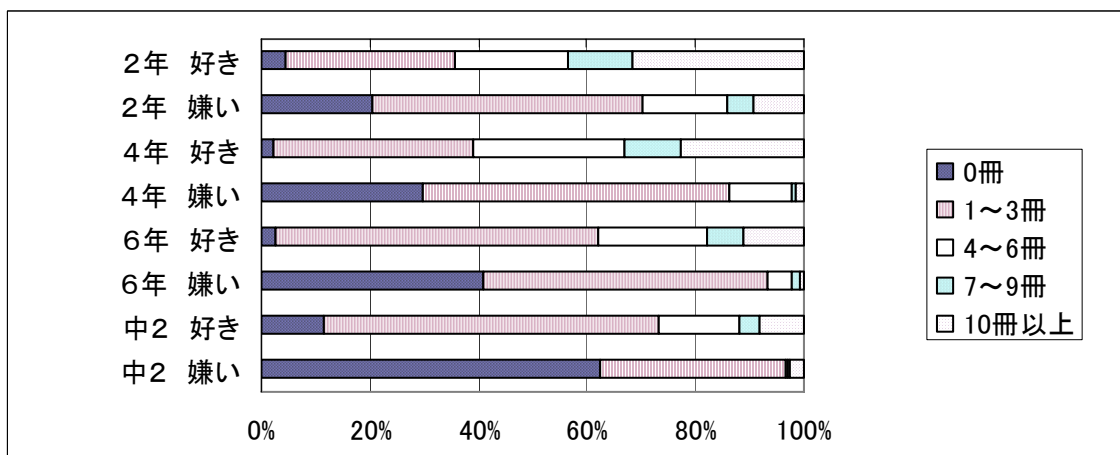


図 2 あなたは 1 か月に何冊くらい本を読みますか（平成 17 年度読書アンケートから）

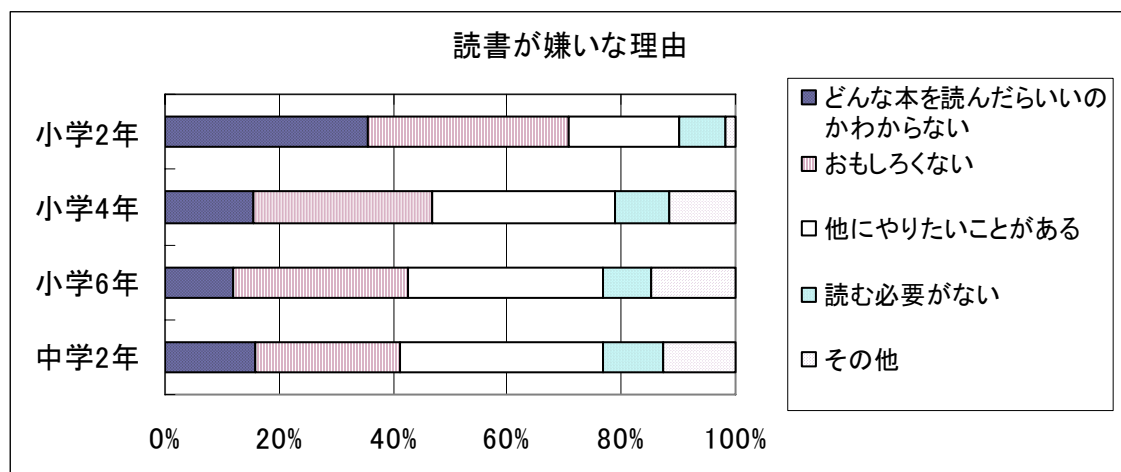


注) 上のグラフの好き・嫌いは、アンケート1で読書が好きと答えた子どもと嫌いと答えた子どもで分けて集計した

ところで、読書が「嫌い」と答えた子どもに、その理由をたずねると、小学 2 年生では「どんな本を読んだらいいかわからない」

が多く、学年が上がるにつれ、「他にやりたいことがある」という回答が増えていきます。また、学年を問わず「面白くないから」という回答が25%以上となっています。【図3】

図3 読書が「嫌い」または「どちらかという嫌い」と答えた人の理由  
(平成17年度読書アンケートから)



(2) 学校図書館をめぐる読書活動

「あなたは学校の図書館で1か月に何冊くらい本を借りますか」という設問に対し、0冊と答えた児童生徒の割合は学年が上がるにつれて増加し、中学2年生では、全体の80.8%の生徒が「1冊も借りない」という答えでした。【図4】

図4 学校図書館で1か月に借りる本の冊数 (平成17年度読書アンケートから)

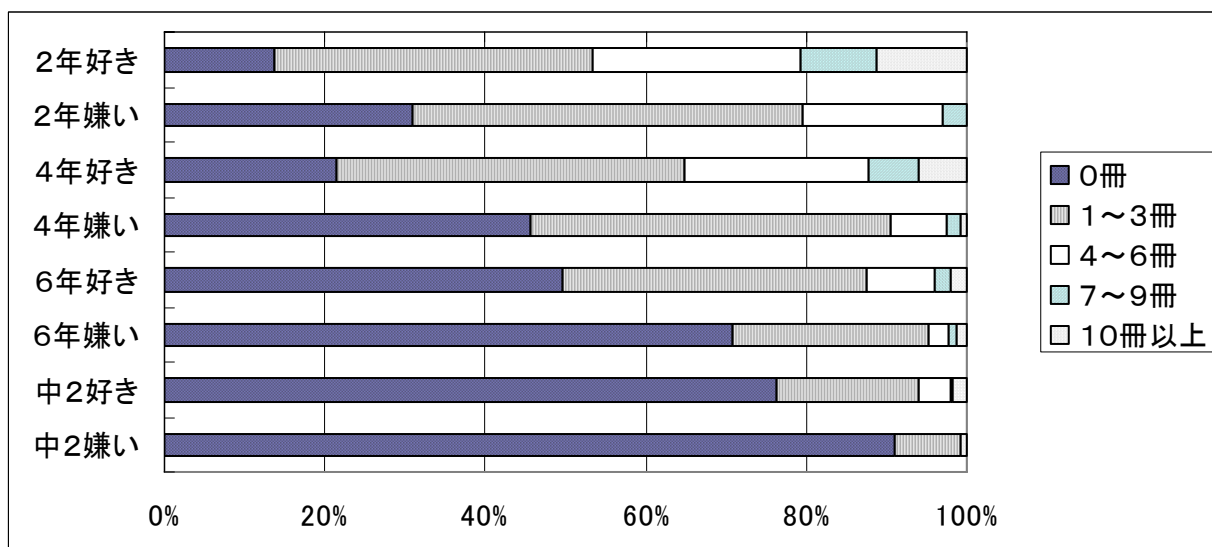


図5 図書室で本を借りない理由（平成17年度読書アンケートから）

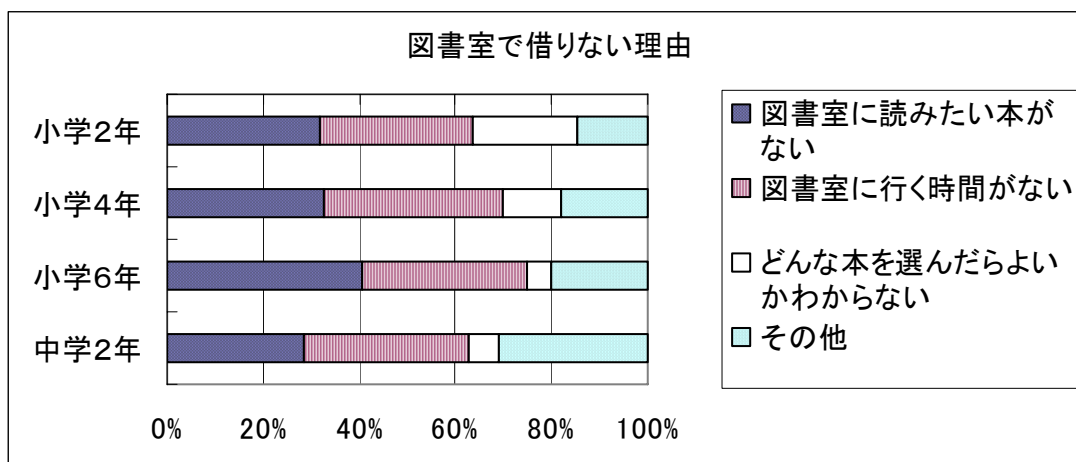
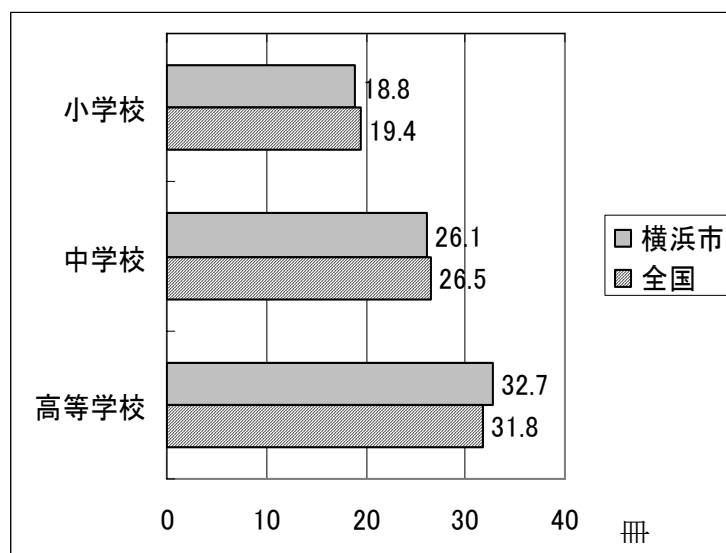


図6 児童生徒一人当たりの学校図書館蔵書冊数（平成16年度文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」を参照し作成。データは平成15年度のもの）



学校図書館（＝図書室）で本を借りない理由をたずねると、どの学年も「図書室に読みたい本がない」「図書室に行く時間がない」という答えが多く、それぞれ合計で60%を超えています。【図5】

学校図書館の実態はどうでしょう。平成15年度の調査では、1校当たりの学校図書館蔵書冊数は、本市の場合、小学校9,586冊、中学校12,810冊で、いずれも全国平均を上回っているものの、児童生徒1人当たりに換算すると、小学校では18.8冊、中学校では26.1冊で、これらは全国平均よりやや少ない数字となっています。【図6】

### （3）学校教育の中での読書活動

始業前の時間を活用した「朝の読書活動」に取り組む学校は本市としては増えてきていますが、全国平均と比べると実施率が低く、特に中学校では3割以下に留まっています。【表2】

全校一斉の読書活動の効果について、教職員からは

- 静かに読むことで、子どもたちの生活態度が落ち着いてきた
- 今まで本を読まなかった子どもが読書に取り組む契機になった
- 子どもの、本を読むことへの抵抗感がなくなった
- 一冊を読み通すことができるようになった

等の声があがっており、特に朝の読書については、一時間目の授業への円滑な移行に効果があったという意見がありました。

次に、読書活動を進めるための関係機関との連携、特に公共図書館との連携についてみると、全国平均に比べ小学校、中学校とも低調です。【表3】

一方、読み聞かせ等を行う読書ボランティアとの連携については、小学校でかなり浸透している様子が伺えます。【表4】

**表2 朝の読書活動実施割合**（平成16年度文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」をもとに作成。数値は平成15年度のもの）

	小学校	中学校
横浜	58.6%	26.9%
全国	79.7%	66.0%

**表3 公共図書館との連携**（同上）

	小学校	中学校
横浜	29.5%	8.3%
全国	56.9%	35.5%

**表4 ボランティアの協力を得ている割合**（同上）

	小学校	中学校
横浜	62.9%	11.7%
全国	38.9%	12.3%

#### （4）読書の習慣付け

『読書アンケート』によれば、小学校入学前に読み聞かせ等をし

てもらった経験のある子どもは全体の7割以上にのぼりますが、読書が好きな子の方が、こうした経験が多かったと回答する傾向が高くなっています。【図7】

図7 小学校入学前に、本を読んでもらったことがありますか

(平成17年度読書アンケートから)

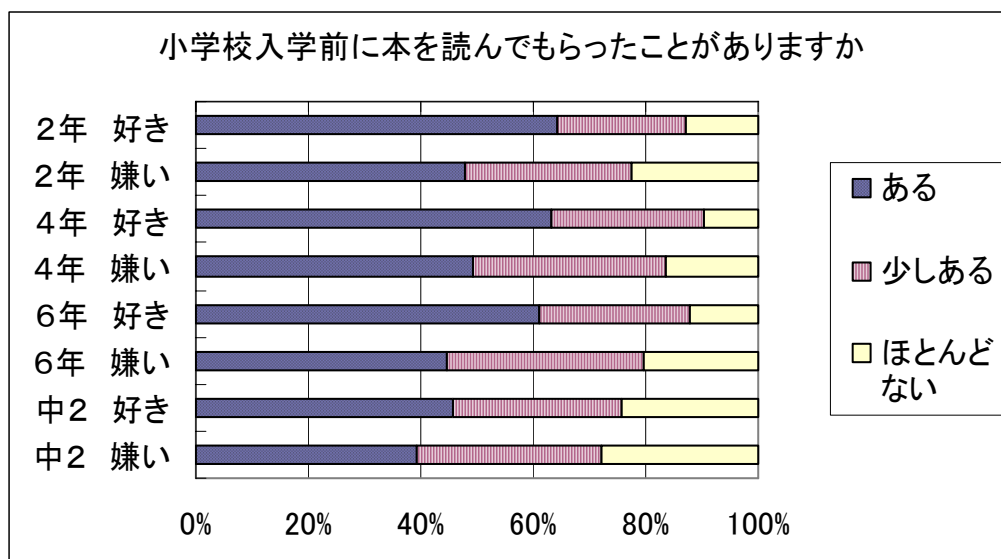
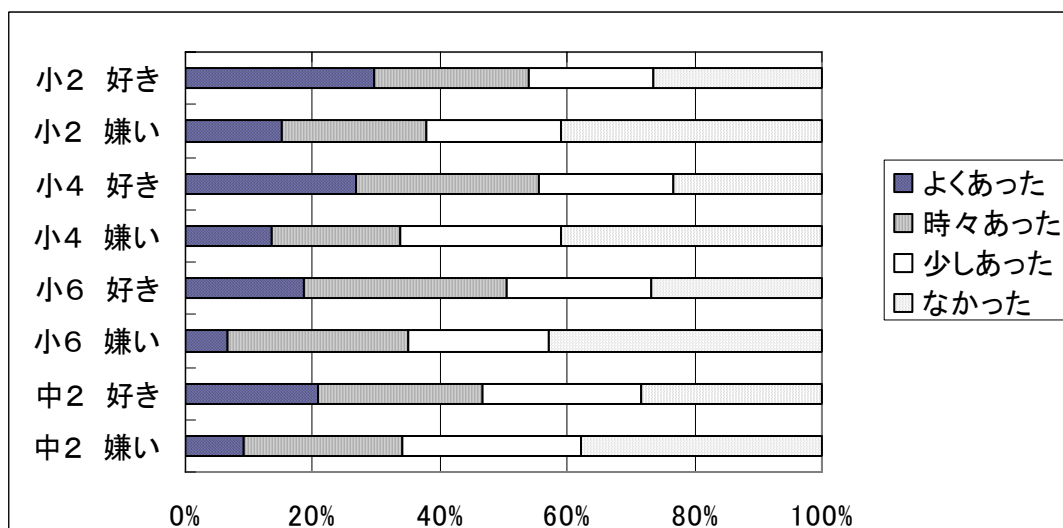


図8 小学校に入学する前、図書館（地区センター図書コーナー、市民図書室等を含む）に連れて行ってもらったことがありますか

(平成17年度読書アンケートから)



また、読書が好きな子のほうが、嫌いな子に比べ、入学前に地域の市立図書館、地区センター図書コーナーなどの図書施設に行った

経験が多いことがわかります。【図 8】

以上の調査結果のまとめとして、横浜の子どもたちの、読書活動の状況を整理すると、次のようになります。

- 学年が上がるにつれ、読書が好きな子の割合が減り、1か月あたりの読書冊数も減少していく
- 学校図書館で一度も本を借りない子どもが、小学2年生では15%程度だが、中学2年生では80%以上に達する
- 学校図書館を利用しない主な理由は「読みたい本がない」「図書室に行く時間がない」等である
- 「朝の読書活動」を実施している学校や、図書館と連携している学校数の割合が、全国平均に比べ少ない
- 読書が好きと答えた子どもは、小学校入学前に読み聞かせをしてもらった経験や、図書館等に連れて行ってもらった経験のある子どもが多い
- 読書が嫌いと答えた子どもに理由を尋ねると、小学校低学年では「どんな本を読んだらよいかわからない」という意見が多い

子どもにとって、興味を持てる本との出会いや、読書への習慣付けのきっかけが、小学校低学年までに与えられることの大切さを、この調査結果は示唆していると考えられます。

### 3 地域の読書環境の現状

#### (1) 市立図書館での読書環境整備

横浜市には、18の市立図書館があり、合計約70万冊の児童書（主として中学生以下を対象とした本）を所蔵しています（平成17年3月現在）。すべての図書館に児童コーナーがあるほか、中・高校生向けコーナーの設置を進めています。横浜市では、司書の有資格者が職員として図書館業務に携わっており、レファレンス（参考調査）や読書相談はもちろん、子どもたちが様々な本に親しみ、興味を持てるよう、本のテーマ展示やブックリスト作成、「おはなし会」等各種行事を実施しています。

学校に対しては、図書館見学や職業体験の受入、読み聞かせ等の本の紹介や調べ学習の支援をするほか、夏休み前にブックリストを

作成し、全市立小中学校に配布しています。また、学校図書館の補完的役割として、教職員の調査研究や授業で使用する図書の貸出、読み聞かせや図書館運営についての講習を行い、学校図書館の活性化・自立化への支援を行っています。

保護者への啓発活動としては、子育て支援事業本部と連携して、ブックリスト『わくわくみつけた』を作成し、各区の福祉保健センターで、4か月児検診の際に配布を行っています。

そのほか、地域文庫等を対象とした団体貸出や、読書ボランティア活動がより効果的に進められるための研修の機会提供として、読み聞かせやストーリー・テリング（素話）等の講座を実施しています。

## （２）その他の図書施設

横浜市には、地域住民の自主的な学習・活動・交流の場として、78館の地区センターと99館のコミュニティハウスが設置されています（平成17年12月現在）。これらには図書コーナーがあり、本の貸出だけでなく、おはなし会等の行事が行われているところもあって、家が市立図書館から離れていて利用しにくい子どもや、市民の身近な図書施設として利用されています。

平成16年度には、市立図書館が中心となって、これまで各施設内に限られていた蔵書情報をデータベース化し、インターネット上での公開を開始しました。

また、94の市立小・中学校の施設内には、学校開放市民図書室が設置されており（平成17年12月現在）、地域住民の自主的な運営により、図書の貸出等が行われています。

## （３）市民活動としての子ども読書活動

横浜市では、昭和49年に磯子図書館が初めての地域図書館として開館するまで、市立図書館1館時代が長く続いていました。そのこともあって、地域では、自宅を開放したり、団地の集会所、自治会館・町内会館等を利用したりして、文庫活動や、読書グループ等による、乳幼児や児童向けの読書活動が、盛んに行われてきました。こうした市民主体の活動は、従来の子ども読書活動を支えてきた基盤にもなっており、それが、横浜における特色のひとつとも言えるものでした。



これらの市民活動は、当初は図書館建設の要望や、地区センター図書コーナー等とのネットワーク化による地域の読書環境の向上を目指しつつ行われてきました。しかし、1区1館の図書館建設計画が実現した現在では、これらの活動は市民の自主的な、あるいは学校、市立図書館、福祉保健センター、幼稚園・保育所等、様々な公共機関と連携した読書ボランティア活動として、行われるようになっていきます。

また、子どもたちが放課後や学校休業日を過ごす場である、はまっ子ふれあいスクール、放課後キッズクラブ、学童保育のような場でも、スタッフや指導員によるもののほかに、市民グループによる読み聞かせ等の活動が盛んに行われています。

このように、読書ボランティアの活動は、子育て支援の一環としての子ども読書活動支援という側面が、より強まってきていると言えます。